

「東洋のカリブ構想」

“The Caribbean of Asia Concept”

～東アジアのクルーズ拠点形成を目指して～

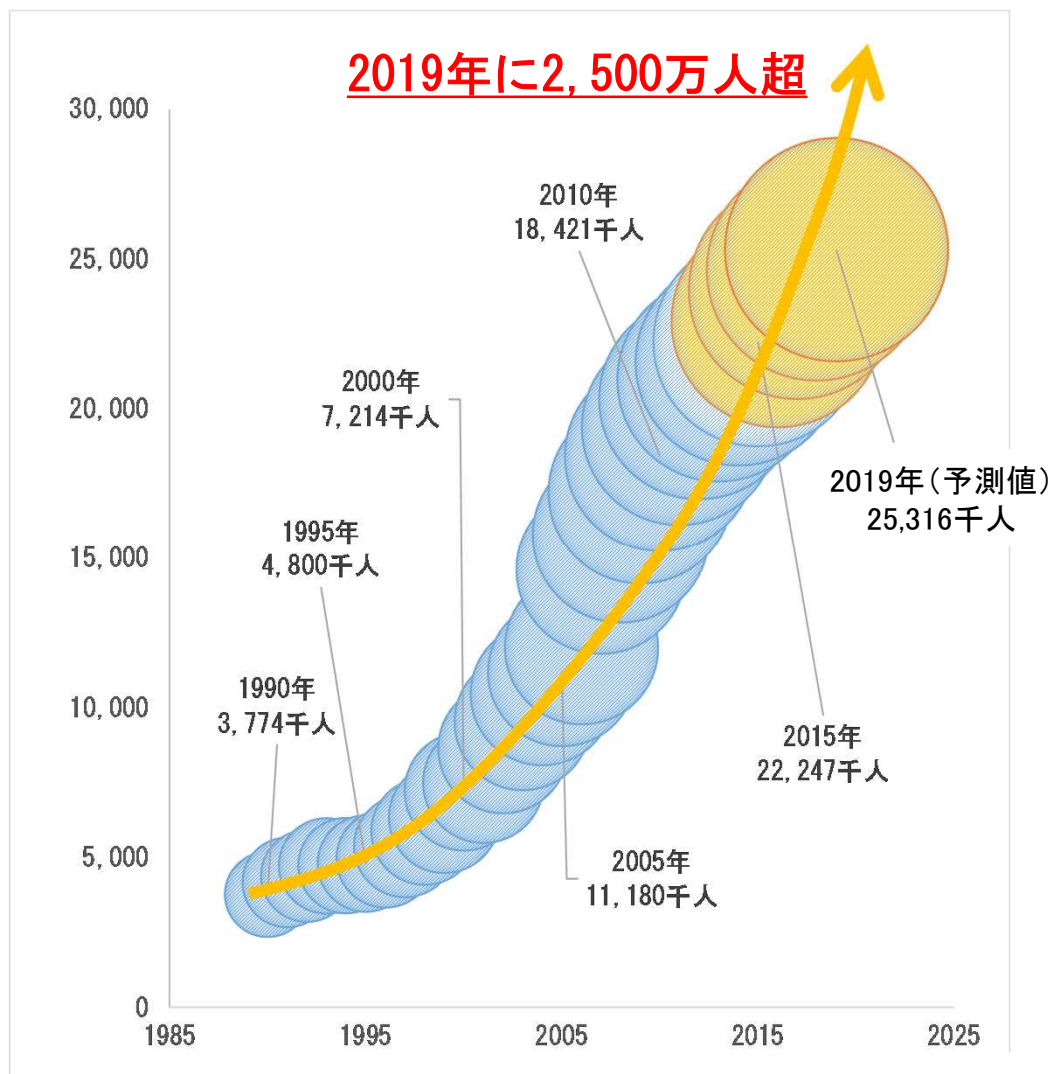


美しい自然と温かい人たちに囲まれて、
～本来の自分を取り戻せる島～

2018年3月

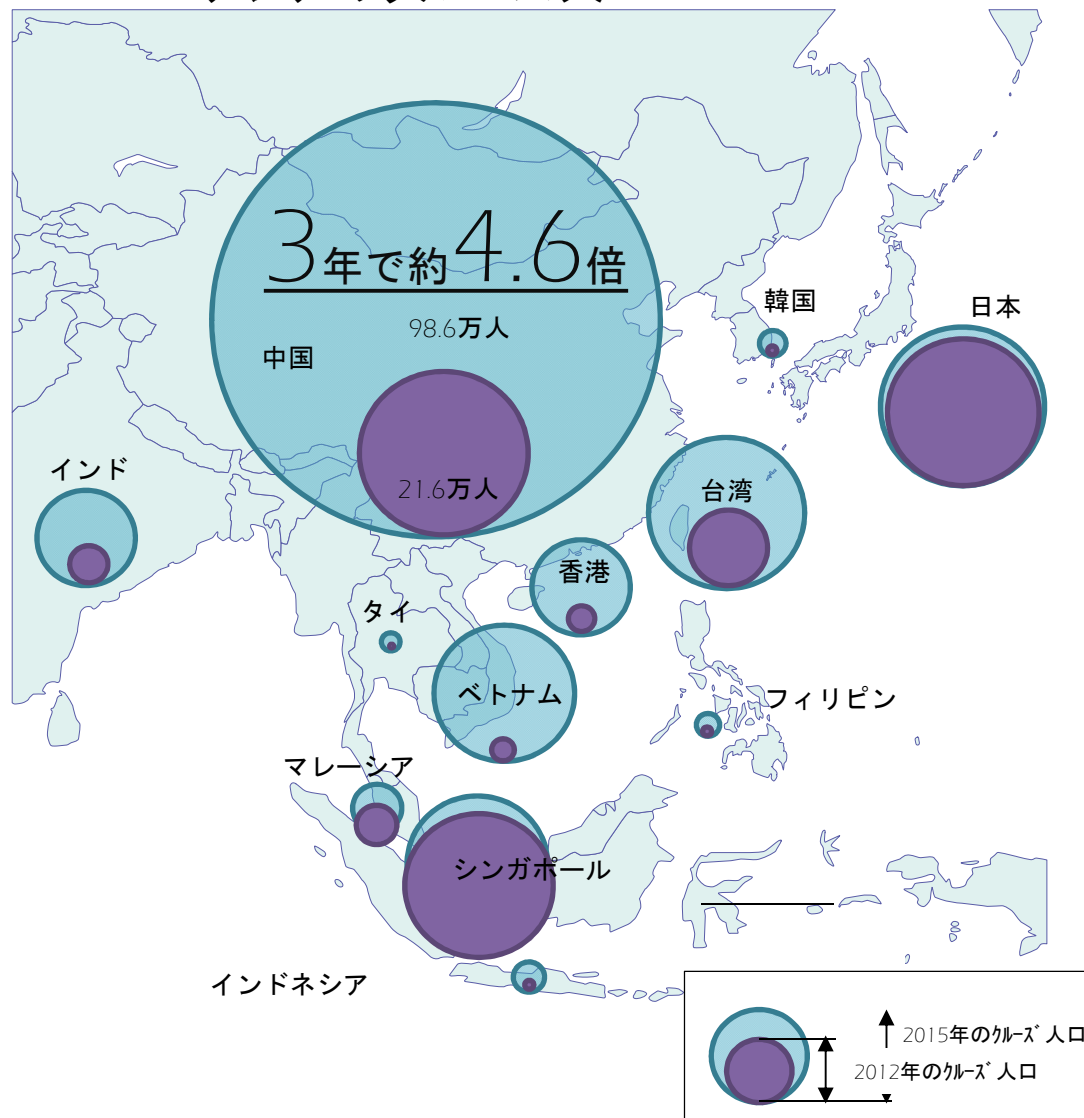
沖縄県

世界のクルーズ船のキャパシティ

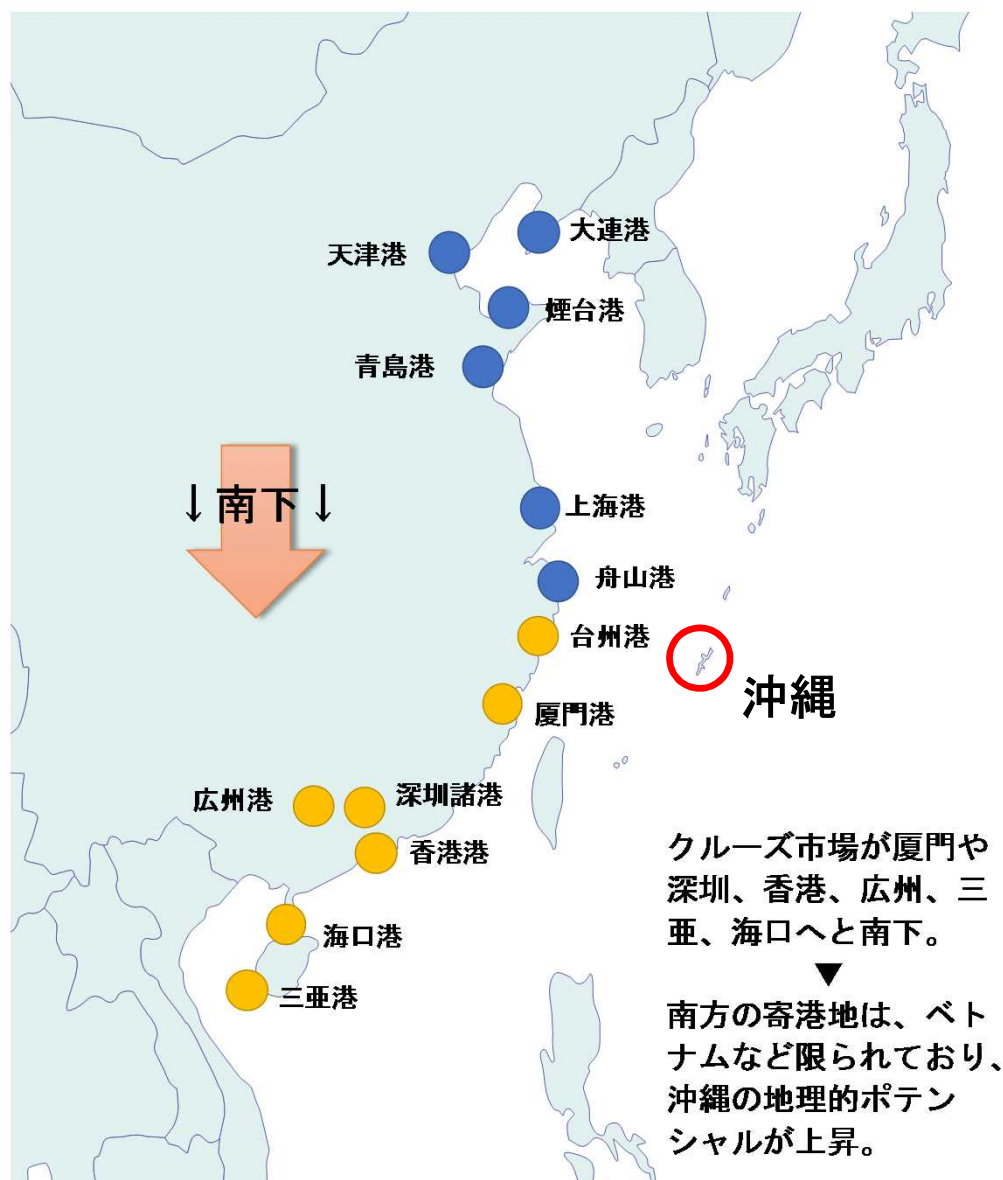


- 2015年の世界のクルーズ船のキャパシティは2,240万人、2016年には2,420万人にまで達する
- 世界のクルーズ市場はさらに今後とも拡大を続け、2019年には2,500万人に達すると予測されている
- アジアのシェアは2016年に9.2%まで拡大し、欧州（地中海を除く）に次ぐ世界第4位に成長
- アジア市場は急成長を遂げ、2016年の対前年の地域別シェアの変化率は世界1位（32.9%）である

アジアのクルーズ人口



- アジアのクルーズ市場が拡大し、2015年の中国のクルーズ人口は2012年の約4.6倍、台湾は2.2倍となっている
- 主要な船社幹部によれば、2020年の中国のクルーズ人口は400～500万人まで拡大するという見通しもある
- カリブ海や地中海のクルーズ市場が20年かけて成長してきた道筋を、アジア市場はより短期間でたどっていくものと予測されている



- 中国のクルーズ市場は拡大を続けながら、より南方の港湾を発着するクルーズが増加傾向にある
- 中国南方からの発着クルーズでは、日数の関係からベトナムなど寄港地が限られている
- 中国においては、日本へのクルーズ旅行が人気となっている
- 沖縄海域は、上海、厦門、香港、深圳、広州など中国の主要港からのクルーズに適した距離にあり、クルーズエリアとしてのポテンシャルが非常に高い
- これまで以上に沖縄県内の港湾に、アジアを中心としたクルーズ船の寄港が増加するものと予測される

- スタークルーズ社による台湾発着定期クルーズの寄港に加え、中国発着のクルーズが急激に増加したことで、過去最高の年間寄港回数を更新し続けている。
- さらに、外国クルーズ船社は大型クルーズ船を東アジアへ相次いで投入し、中国、台湾、日本マーケットの拡大に乗り出している。欧米系船社のアジア周遊クルーズでの寄港地として沖縄の知名度が高まっている。

1. スタークルーズによる定期クルーズの実施

1997年より台湾・基隆港発着の定期寄港を実施。2016年以降は3隻体制で沖縄への寄港を実施。

2. 中国発着クルーズの増加

アジアのクルーズ人口の増加に伴い、中国からの沖縄への寄港回数が増加している。今後も、ノービザ化、入国審査の簡素化等の要因もあり寄港が拡大すると想定される。中国・華南地域発着のクルーズ船による沖縄寄港が増加している。

3. 欧米系ラグジュアリー船の増加

継続した誘致活動の成果もあり、米国シルバーシー・クルーズ社、英国キュナード社、仏国ポナン社などの欧米系ラグジュアリー船による寄港及び寄港予定が徐々に増えてきている。

◆クルーズ船寄港回数の増加

- 2016年の日本への寄港回数は2017回となっており、その中で沖縄は388回で都道府県別では1位、国内シェアは約20%となっている
- 2012年の125回から、2016年には388回と、4年間で約3.1倍に増加
2017年は515回となった

◆クルーズ船による入域外国人観光客数の増加

- 2012年の146,800人から、2016年には718,100人と、4年間で約5倍に増加
2017年は888,300人となった

◆クルーズ船社との連携強化

- 「官民連携による国際クルーズ拠点」形成において、世界最大のクルーズ船社であるカーニバル・コーポレーションやゲンティン香港の2社が沖縄への投資を決定

◆港湾整備の進展

- 県内主要港湾のクルーズ船受入にかかるバースやターミナル等の整備が加速⇒受入容量の拡大

◆国の政策の後押し

- 我が国では、「明日の日本を支える観光ビジョン構想会議（首相官邸）」において、訪日クルーズ旅客数を2020年に500万人とする目標値を設定し、「お断りゼロ」などの施策を推進するとともに、我が国のクルーズ市場を成長させ、クルーズ船の寄港による地方創生を図るとしている

官民連携による国際クルーズ拠点形成とは

国土交通省港湾局は2017年1月31日に、「官民連携による国際クルーズ拠点」を形成する港湾として、横浜港（横浜市）・清水港（静岡県）・佐世保港（佐世保市）・八代港（熊本県）・本部港（沖縄県）・平良港（宮古島市）の6港湾を選定した。「官民連携による国際クルーズ拠点」では、ターミナル等の旅客施設への投資を行うクルーズ船社に岸壁の優先使用を認めるなどの新たな仕組みを導入し、2020年の供用開始を予定している。優先使用できる期間は概ね15年から20年で、投資対象施設の管理運営期間と同一となる見込み。

◆沖縄クルーズ戦略の策定

- 沖縄県では2017年3月に沖縄クルーズ戦略を策定し、クルーズ市場の分析や誘致・受入方針の検討を行い、2021年度の「海路による外国人観光客数」を200万人とする目標を設定した

◆沖縄認知度の向上

- 国内外における沖縄観光ブランド「Be.okinawa」の発信により、東アジアを含め東南アジア、欧米、豪州での沖縄の認知度が向上している（動画、現地イベント等の発信効果）

- 沖縄県内の港湾整備が進展しており、2020年にはハード面での受入許容量が飛躍的に増える
- クルーズの行程は、外国船社の場合、通常2年前から1年半前までに決定されるため、2020年のキャパシティ拡大に向けた誘致活動を、これまで以上に強化する必要がある

那覇港	泊ふ頭地区8号岸壁(水深10m 延長372.5m)(16万トン級(全長335m程度)対応) 新港ふ頭地区9号10号(水深13~15m 延長800m)(20万トン級対応) 新港ふ頭地区12号13号(水深12m 延長430m)【未整備】	
本部港	本部地区岸壁(水深10m 延長420m)(20万トン級対応)【整備中※】	※2020年供用予定
中城湾港	新港地区岸壁(水深10~13m 延長445m)(16万トン級対応)	
石垣港	新港地区岸壁(水深10m 延長420m)(20万トン級対応)【整備中※】 新港地区岸壁(水深12m 延長410m)(14万トン級対応)【未整備】	※2018年暫定供用予定(7万トン級対応)
平良港	漲水地区岸壁(水深10m 延長420m)(14万トン級対応)【整備中※1】 漲水地区岸壁(水深10m 延長340m)(11万トン級対応)【整備中※2】	※1 2020年供用予定 ※2 2017年12月より暫定供用中(5万トン級対応)

台湾、中国、韓国など近隣アジア諸国との距離(地理的優位性)

亜熱帯の豊かな自然(サンゴ礁の海、
マングローブ、熱帯林、固有生物)



歴史遺産(世界遺産「琉球王国のグスク及び
関連遺跡群」、第二次世界大戦戦跡)

島嶼性(魅力的なアイランド・ホッピング、テンダーボート移動やゾディアック上陸の魅力、
定常型・定点型クルーズの可能性)



多様なイベントや体験メニュー
(マリン体験、自然体験、伝統文化体験等)

沖縄の**伝統文化**(祭り、組踊、織物染色、空手、
焼き物、漆器、ガラス工芸、音楽、空手)



那覇国際空港から極めて近い**那覇港の立地**
(国内外からのフライ&クルーズ発展の可能性)

クルーズ船で入域する訪日外国人に対するノービザ制度
の開始、**CIQ手続きの迅速化**

「東洋のカリブ構想」のイメージ

「東洋のカリブ構想」は、2016年度に取りまとめた「沖縄クルーズ戦略策定事業報告書」での分析結果を受けて、沖縄のクルーズ振興に資するため、中長期的な視点に基づいた包括的な構想として策定するものである



(写真)2017年11月2日 シートレード・クルーズ・アジアパシフィック in 上海(中国)において講演を行う沖縄県文化観光スポーツ部長

- ① 官民連携による国際クルーズ拠点及び県内港湾の着実な整備等による寄港地開発の推進
- ② 南西諸島周遊クルーズの誘致・推進
- ③ 国内外との豊富な航空路線活用したフライ&クルーズの推進
- ④ 国内外クルーズ船の発着港、拠点港、母港化への推進
- ⑤ シートレード・クルーズなどのクルーズ商談会の沖縄での開催(誘致)によるクルーズ拠点としての認知度向上

「東洋のカリブ」形成に向けて①

(東アジアのクルーズ拠点形成の取組み)

【情報発信、イメージ戦略】

- 沖縄の「東洋のカリブ構想」を国内外に強力かつ持続的に発信し、クルーズ振興における沖縄の将来ビジョンを提示していく
- シートレード・クルーズ・アジアパシフィックなどのクルーズ商談会を積極的に誘致し、世界中に東アジアのクルーズ拠点としての認知度の向上を図っていく

【クルーズバース・専用ターミナルの整備、促進及び誘致の取組み】

- 那覇港については、新港ふ頭9号・10号岸壁のドルフィン整備完了に伴う22万トンクラスの誘致及び若狭バース（泊8号岸壁）の15万トンクラス受入検討結果を踏まえた誘致に取り組む。また、第2クルーズバース及び専用ターミナルの整備を促進していく
- 中城湾港については、航行の安全性の検討結果を踏まえて、西ふ頭への16万トンクラスの誘致を図っていく
- 石垣港については、今後の2018年の7万トンクラス対応のバースの暫定供用、2020年の20万トンクラス対応バースの暫定供用、2021年の完成を念頭に置いた、受入容量段階に応じたトンクラス毎のクルーズの誘致に取り組んでいく
- 官民連携による国際クルーズ拠点整備に指定された本部港及び平良港については、それぞれ、20万トンクラス、14万トンクラスに対応したバースを着実に整備していくとともに、ゲンティン香港及びカーニバル・コーポレーションが整備するターミナルについて、連携して取り組む。また、平良港については、併せて漲水（はりみず）地区への11万トンクラスのバースを整備する
- クルーズバースが整備されていない地域や小規模離島へのクルーズ船の誘致を図るため、テンドーボートで上陸可能な港湾・漁港等及び上陸箇所の観光スポット等の情報を整理し、各クルーズ船社へPRしていく

「東洋のカリブ」形成に向けて②

(東アジアのクルーズ拠点形成の取組み)

【受入、誘致の方針】

- 国の進める「お断りゼロ」を目指し、県内各港湾の連携を深めるとともに、乗客のF I T（個人旅行客）割合や国籍情報など様々な情報の共有を図る
- 継続的にクルーズ商談会へ参加し、クルーズ関連の最新情報の収集に努めるとともに、得られた情報については、県内各港湾のクルーズ促進協議会等へ情報を共有する。また、積極的に各船社・旅行社等のキーパーソンとの面談の時間を設定する
- 定期的に船社、船社代理店、旅行社等を訪問し、沖縄県の最新の港湾の状況、観光コース等をP Rする
- 寄港地の決定権を持つキーパーソン等の招聘を行うとともに、県内港湾、観光資源、観光施設等を視察してもらい、意見交換会の場を設定する。得られた意見・情報を県内各港湾のクルーズ促進協議会等へ提供し、今後の対策、方針を検討する
- カジュアル、プレミアム、ラグジュアリーなどのグレード、港湾容量に基づくクルーズ船のトンクラスに応じたきめ細かい誘致に取り組む
- 異なる魅力を有する沖縄の島々を周遊するアイランドホッピング型のクルーズ振興に取り組む
- 沖縄のエメラルドグリーン、コバルトブルーの海、亜熱帯の山々を持つ魅力的な離島をテンドーボートで移動するクルーズスタイル、小規模離島などに上陸するエクスプローラー型のクルーズ船の誘致に取り組む
- 基隆、上海、廈門、済州、博多などの港湾管理者や自治体との観光プロモーションに関する連携を深めるとともに、多様なクルーズ航路を構築する。既存のM O U（覚書）を活用した共同誘致や、新たなM O U締結に向けた取組みを行う
- クルーズ船客の満足度の向上を図るとともに、全県にクルーズの経済効果をもたらすため、ランドオペレーターとも連携し、県内の様々な地域、観光資源を周遊するコースの造成に努める
- クルーズ船客の満足度や利便性の向上を図るため、各港湾における観光案内所を設置するとともに、地域への経済効果を念頭に地元産品等の販売所の設置に努める
- クルーズ船客に歓迎の意を表すとともに、満足度の向上を図るため、可能な限り各港湾のクルーズ促進連絡協議会と連携した「おもてなしイベント」等を実施する

「東洋のカリブ」形成に向けて③

(東アジアのクルーズ拠点形成の取組み)

【受入、誘致の方針（続き）】

- 沖縄観光のPRを行うため、船内における沖縄フェア等を実施する
- クルーズ船社やチャーターへのインセンティブとして、沖縄を寄港地とするクルーズ商品に対する広告支援等を実施する
- 沖縄への認知度の向上、渡航意欲を喚起するため、発地側における沖縄観光プロモーションを実施する
- 受入体制を整備するため、バスツアー等に添乗する通訳ガイドの養成に努める
- クルー（乗組員）の満足度を高め、再寄港を促進するため、寄港地での飲食店情報等を提供するとともに、陸地におけるクルーの休憩所等でのフリーWiFi（ワイファイ）環境の整備に取り組む

【沖縄発着クルーズの推進】

- 県内各港湾において、段階を踏んだクルーズ船の発着港、拠点港、母港化に向けた取組みを行っていく
- 沖縄でのクルーズ客の乗下船（入れ替え）を促進し、ターンアラウンド港化を推進していく
- 平良港での官民連携による国際クルーズ拠点形成、下地島空港への国際線就航を契機とした、フライ&クルーズを推進する
- 空の玄関である那覇空港と近接している那覇港のポテンシャルを最大限活かし、那覇空港、「うみそらトンネル」、若狭クルーズバス、の最短移動行程を活かしたフライ&クルーズを推進する
- 将来に向けて、カリブ海におけるクルーズ船社自体による「グランドターク島」のような大規模開発について、船社及び地元関係機関等とその可能性について意見交換していく

【要請活動】

- 那覇港の第2クルーズバースをはじめ、今後の県内港湾の着実な整備に向け、引き続き政府、関係機関等への働きかけ等を行っていく
- クルーズ船寄港時の滞在時間を延伸し、経済効果を高めるとともに、船社やクルーズ船客にストレスフリーな環境を提供するため、CIQ等人員体制・機材の整備等について、政府等へ要請していく
- 本部港は、外国との直接の入出港が可能となる「指定港」とするため、政府等へ要請していく

Phase 1 (2018年～)

- ・クルーズ商談会でのプレゼンテーション実施、セッションへの参加
- ・誘致活動の強化（クルーズ船社訪問、FAMツアーの実施）
- ・県内クルーズ関係者との情報共有・連携強化（ネットワーク構築）
- ・クルーズ船を受入可能なバース及び専用ターミナルの整備（国・各港湾管理者等）

Phase 2 (2019年～)

- ・フライ&クルーズの促進
- ・シートレード・クルーズ・アジアパシフィックの沖縄開催の検討（2020年～）
- ・南西諸島周遊クルーズの誘致（チャータークルーズor船社による自主クルーズ）
- ・沖縄でのクルーズ客の乗下船（入れ替え）の実現（ターンアラウンド港化）
- ・基隆や厦門など他港との連携強化によるクルーズ航路の多様化、MOUを活用した共同誘致

Phase 3 (2021年～)

- ・那覇港第2クルーズバースの整備
- ・平良港と下地島空港を活用した宮古圏域での国際リゾート地の形成
- ・クルーズセンター（ターミナル、ショッピングセンター、ホテル、プールなどの複合施設）の立地、ホテルシッパの誘致など民間投資の促進
- ・クルーズ船社の沖縄支社・支店の立地、船舶関連産業の集積
- ・海路による入域外国人観光客数200万人達成（2021年度）

沖縄海域を「東洋のカリブ」(東アジアのクルーズ拠点)にするという高い将来ビジョンを世界中に発信することにより

- ① 世界中の多くのクルーズ船社、船舶代理店、旅行社、港湾関係者、観光関連事業者などの沖縄への関心を喚起する
- ② アジア・パシフィック地域はもとより、世界中のクルーズ船の寄港へつなげる
- ③ 沖縄の潜在的な魅力（自然、文化、地理的優位性、人口増加地域）から、多くの投資を呼び込む
- ④ 「世界水準の観光リゾート地」としての地位の確立、世界的な認知度の向上を図る
- ⑤ 新たな那覇港第2クルーズバース及び専用ターミナルの整備を促進する
- ⑥ クルーズ振興に積極的な日本政府の港湾整備などの公共投資を呼び込む

「国際物流ハブ」、「国際旅客ハブ」、情報通信産業の「スマートハブ」などの産業とも連携し、東アジアの中心である「沖縄」に国内外の「モノ」、「ヒト」、「情報」が集積、発信する拠点的形成し、沖縄の新たな成長エンジンにする

～ 20億人の巨大市場が4、5時間圏内に～



沖縄の発展に向けた成長エンジンとして加速
～アジアの成長、沖縄の魅力を活かし、更なる投資を呼び込む～

「東洋のカリブ」拠点形成のイメージ

- 沖縄が、カジュアルからラグジュアリーまで幅広く対応した“クルーズデスティネーション”へ
- 沖縄海域が「世界水準の観光リゾート地」となり、将来「東洋のカリブ」と呼ばれる



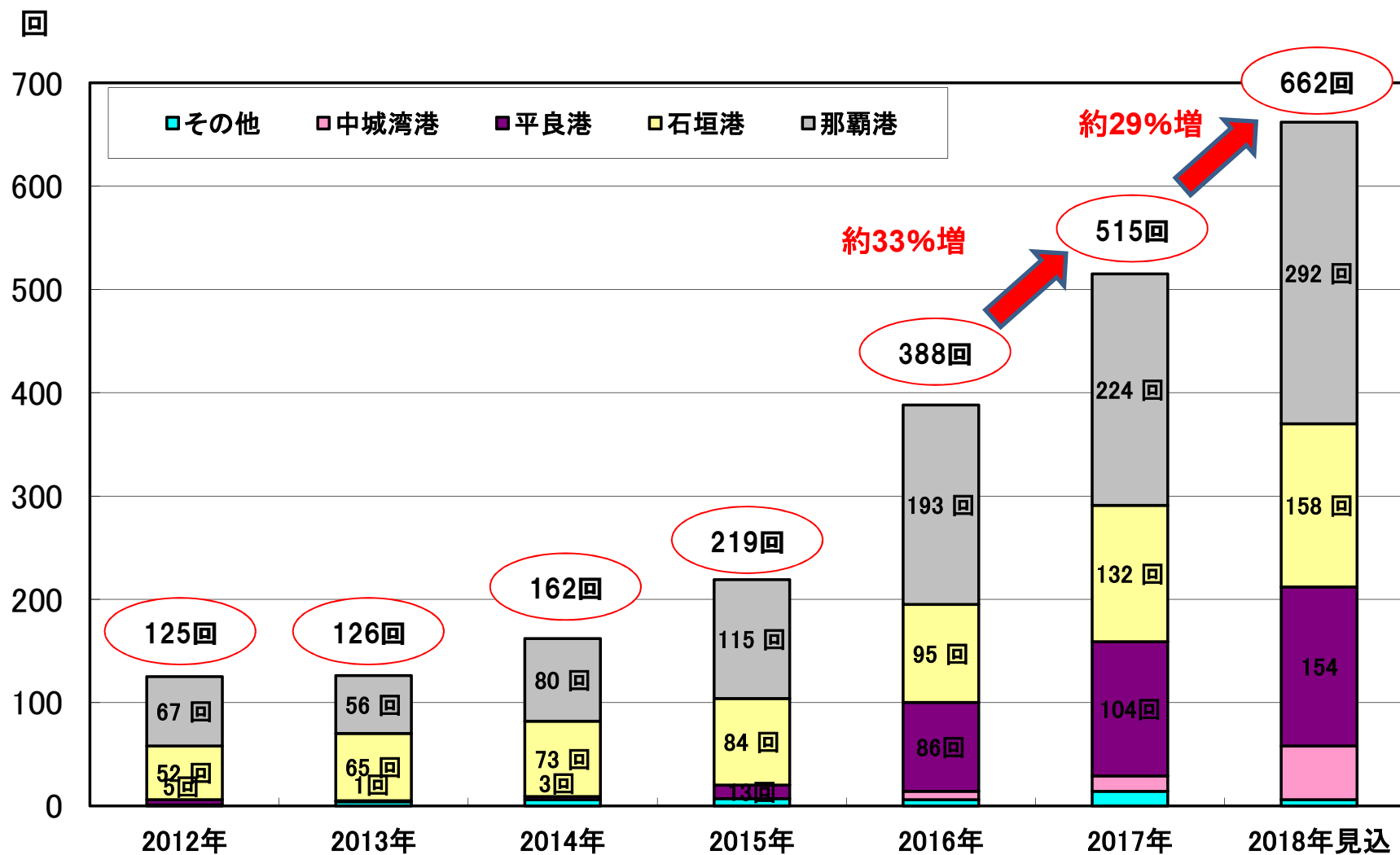
美しい自然と温かい人たちに囲まれて、
～本来の自分を取り戻せる島～

資料編

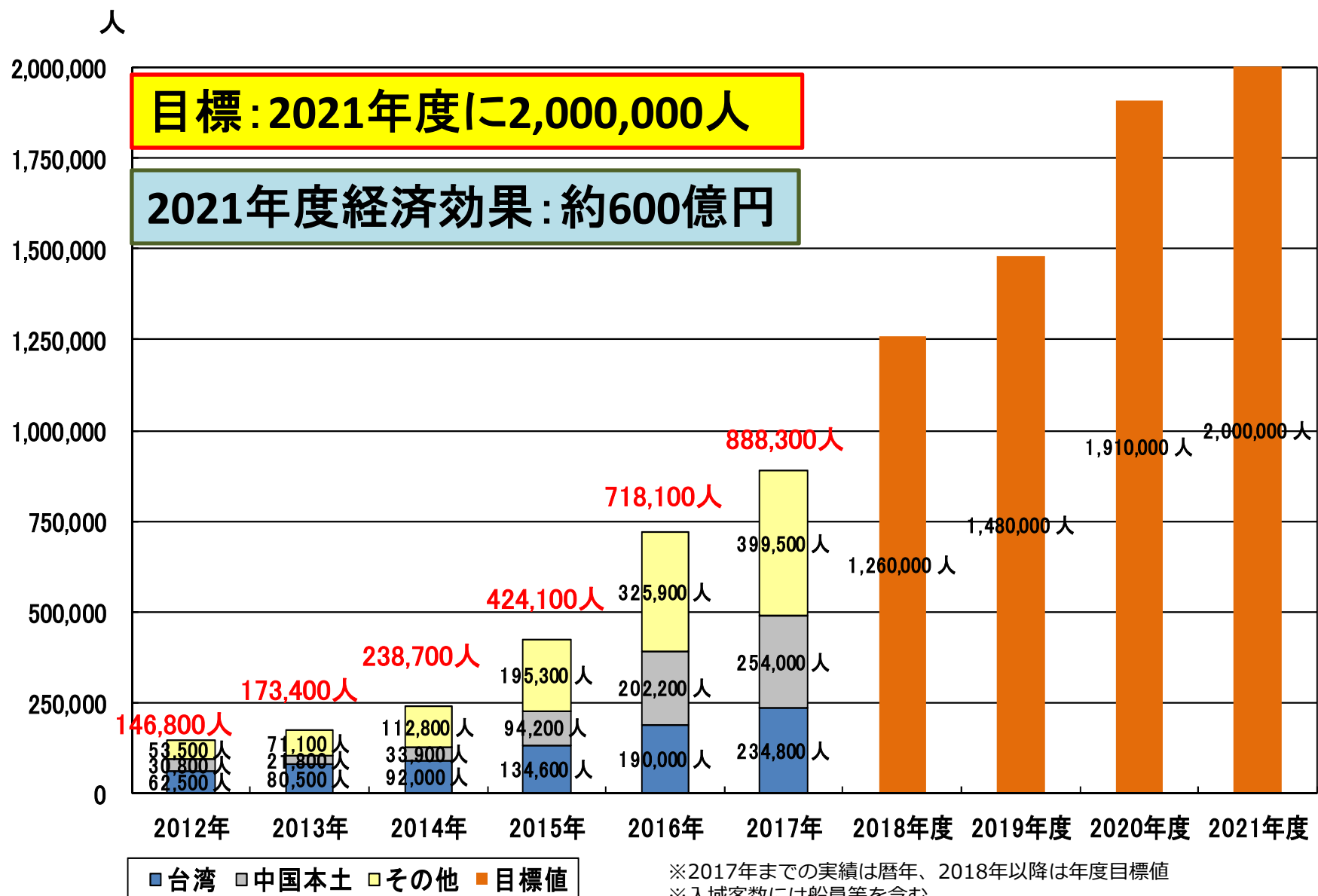


美しい自然と温かい人たちに囲まれて、
～本来の自分を取り戻せる島～

寄港回数の推移(暦年)



※2018年見込は、2018/1/15沖縄総合事務局発表の数値



2017 Asia Cruise Forum Jeju

沖縄が『2017アジア最優秀寄港地』を受賞！（2017年8月25日）

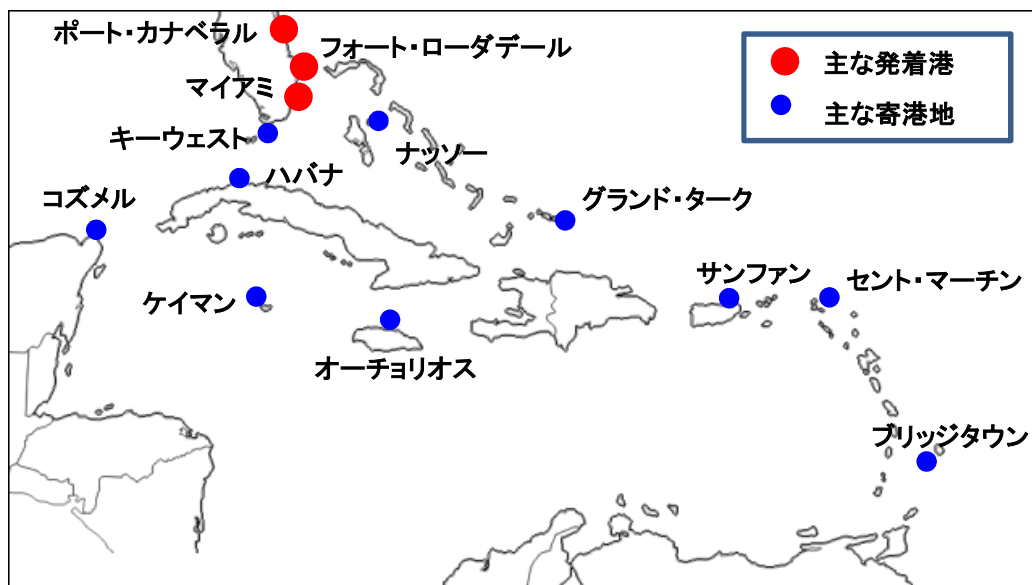


寄港回数に加え、沖縄県の自然、文化、観光地としての魅力の豊富さ、地理的優位性、C I Qの迅速性など総合的に評価された



～美しい自然と温かい人たちに囲まれて、
本来の自分を取り戻せる島～

- ◆ 年間を通じてクルーズ船が就航しており、発着地はフロリダ州のフォート・ローダデル港、マイアミ港がメインとなっている
- ◆ 8月から10月はハリケーンのシーズンとなり11月以降がクルーズのトップシーズン
- ◆ 3泊程度のショートクルーズから世界1周のロングクルーズまで様々なクルーズの発着、寄港が行われており、世界最大のクルーズ船など各社の最新鋭の客船が配船されている
- ◆ マイアミ港は9隻のクルーズ船が同時接岸可能で、C I Q手続きなどを行うターミナルは8棟整備されており、マイアミ空港から車で30分程度。ローカル客のみでなく、フライ&クルーズも行われている



セント・マーチン島

